2019 年 3 月号　Vol.1 No.3　一般財団法人 松本財団 発行

KIZUNA TOPICS No.3　絆　MATSUMOTO ZAIDAN

「キューバ人材育成基金」設立に関する調印をラテンアメリカ医科大学本部（ハバナ）にて実施

（一財）松本財団の松本謙一代表理事は、キューバとの付き合いも長く、かねてキューバの医療人材育成の支援の為に、「キューバ人材育成基金」の設立を考慮していたところ、今年に入りキューバ保健省よりラテンアメリカ医科大学に於ける「基金」の活用について打診があり、此の度の調印に至った。その調印にあたり、松本代表理事ほか関係者が、本年２月末、キューバの首都ハバナを訪問した。現在、諸般の事情からキューバ訪問には、トロント（カナダ）経由でハバナに向かうのが一般的だが、トロント空港での乗り継ぎ時間も含めると約２０時間の長旅となる。しかし、各国からの訪問客の中には、日本人の顔もちらほら見かける昨今である。

調印式は、２月 28 日ハバナ郊外にあるラテンアメリカ医科大学に於いて行われた。一行は、学長をはじめ多数の大学関係者や学生達による熱い出迎えを受けた。学長よりこの大学についての概要説明の後、調印式が取り行われた。翌日、在キューバ日本大使館を表敬訪問し、藤村特命全権大使に報告された。

今回、基金を立ち上げた背景として、松本代表理事の想いを以下に記す。

キューバ人材育成基金の立ち上げの背景 ～松本代表理事コメント～

思い起こせば、今は亡き、フィデル・カストロ国家元首（国家評議会議長）に、初めてお会いしたのは、約 40 年前。1978 年の「SALUD PARA TODOS= HEALTH FOR ALL」展示会の折であった。 握手をした際も彼自身「自分は、暴力的革命主義者ではない。『万民平等』を信奉する、社会主義者である」と強調されたとおり、とても「革命の戦士」とは思えない程の柔らかく小ぶりの手のひらであった。

以来、時には、病院・研究所訪問、医療関係者との会談、医療機器の組み立て工場の打ち合わせ、時には革命広場でのフィデルの独立記念日演説への参加等、その後数十回に及ぶキューバ訪問となった。

80 才余となった今でも、月に平均 2 回は、海外に足を運ぶ小生のことゆえ、これ迄に訪問した国々は、数多あれど、その中でもキューバという国は、何とも一言では形容し難い国の１つである。

一口で申せば、革命後 60 年を経た今でも、「とても貧しい国」。されど、人々は、何故か「陽気！」。民族性もあろうが、皆が揃って低所得の割には、「医療・教育」は無料とのこと。にも拘わらず、カストロ・イズムの影響か、今だに貧しい自国の為のみならず、他の中南米・アフリカ諸国の医療・教育迄、助けようという、その心意気には、恐れいる。これを支えているのは、やはり、「優れた人材とその育成」に、その原点が、あるのではなかろうか。そこに、辿りついた途端に、もとより金満家ではない身ゆえ、「貧者の一灯」として、今回の「（医療）人材育成基金」の設立に、思い至ったのである。

ラテンアメリカ医科大学の概要

もともとは、海軍のアカデミー学校であった。1998 年、カリブ海一帯を大きなハリケーンが襲い大きな被害を及ぼし、数千人の人命が奪われた。フィデル・カストロは、このような被害のあった時に、人命救助が行える医療人材の育成を非常に重要と考え、自国だけでなく、海外からの学生も広く受け入れるべくラテンアメリカ医科大学の設立に至った。

ラテンアメリカ医科大学は、調印を行ったハバナ本部のほか、キューバ全土にいくつかある。本部の学生は 1,200 人、全体としては 3,500 人の学生が学んでおり、教員は 350 人。

85 か国からの留学生がおり、その中でも一番多いのがコロンビアで、ついでナミビア、アメリカからの学生という説明を受けた。歓迎セレモニーでは、台湾やベトナムからの学生がフルートや歌を披露してくれたが、台湾やベトナムなどアジアからの留学生もいる。しかし日本からの留学生は、現在も含め、此れまで１人もいないとのことであったが、主たる教育が全てスペイン語で行われることも要因も１つであろう。

驚くべきは、教育費、食費並びに住居費は、全ての学生に対して一切無料とのことである。フィデル・カストロの教育・医療無料の精神はここにも息づいている。

入学に際しての条件として、①年齢は 18 才から 25 才以下であること、②6 年間の勉学の後は、夫々の自国に帰り、自国の医療の発展に寄与することである。但し、大学院進学など諸事情により延長するケースもある。

今年は大学が設立されてから 20 年ということで、2019 年 7 月 12 日～ 16 日、20 周年設立記念セレモニーが、この地で大々的に開催される予定。

ラテンアメリカ医科大学 にて。右側は、調印を交わしたアントニオ・ホセ・ロペス・グティエレス医科大学長

～在キューバ日本大使館公邸にて～
真ん中は藤村特命全権大使、左側は森田一等書記官

中南米、アフリカの学生達

感染分野での人材育成を考える

青木　眞（感染症コンサルタント　米国感染症専門医）

ホスピタリスト（家庭医）の存在

本年２月３日（日）に松本理事長も関係の深い、ホテルオークラ東京で小池都知事、小泉進次郎国会議員、岡本財務省事務次官といった錚々たるメンバーを集めて、黒川清先生率いる日米医学医療交流財団 JANAMEF の 30 周年記念会が持たれた。トピックスは「日本における『ホスピタリスト』導入の効果と留意点」である。

ホスピタリストという概念に馴染みの無い向きもおられると思うが、広い意味での総合診療医である。すなわち全臓器を横断的に診る総合診療医が病院内を中心として働けばホスピタリスト、診療所や在宅を中心とすれば家庭医などと呼ばれる。

感染分野でのホスピタリストの役割

さて、「感染分野での人材育成」であるが、元来、感染症の訓練に最適な場所を提供するのは、このホスピタリストや家庭医といった総合診療医達である。なぜなら感染症は全臓器に起こりうるからである。筆者の日常の教育活動の殆どが感染症の教育というより、総合診療の教育である所以である。ひるがえって、ある統計によれば、多くの先進国で「総合診療医」といった概念にあてはまる医師の割合が 20～50％といったなかで、日本のそれが 0.2％という統計は驚異的であり、総合診療医自身の不足もさることながら、総合診療医が感染分野での人材育成に不可欠である事を考えると感染症教育の点からも深刻な事態である。

総合診療医の定義

「日本では多数の開業医がプライマリーケアの現場で総合診療医として機能しており、その割合は先進国のそれに匹敵する（だから問題ない）」とする意見もあるようだが、筆者には疑問である。具体的には総合診療医の「定義」が問題である。すなわち「総合診療医」とはどのような訓練を経た、どのような能力を持つ医師を指すのかという「定義」が最初に議論され整理されるべきである。その後初めて「総合診療医でしか任務を全うできない開業医という職種に、本当の総合診療医が何％いるのか？（総合診療医は足りているのか？）」という議論が可能となる。「レーシングカーの運転席に乗っていれば、優勝を狙える本物のレーサーであると言えるのか」という議論である。

日本は疫学的思考が苦手

疫学的思考（検討対象を定義し、物事の損得を定量化する作業）が苦手なこの国独特の病理が、総合診療医の過不足議論の入り口であるべき「総合診療医の定義」不全という形で表現されている。「感染分野での人材育成を考える」ことは、この病理の更にその先のことである。

JRSA 理事会、懇親会開催される

2018 年 12 月 17 日（月）14:00 より単回医療機器再製造推進協議会（JRSA）が、日本橋ライフサイエンスビルディングにて開催された。今回の理事会で、新たに 4 社の企業の加入が承認され、会員数は合計 30 社となり、今年度の目標である 20 社を大幅に上回った。

各委員会からの活動報告の後、一般社団法人日本病院会との意見交換会に向けて打ち合わせに関する現況報告、当協議会の特別会員であり、かつ日本病院会の感染対策委員会委員である神戸女子大学の洪愛子教授から、日本病院会が実施した「単回医療機器再製造に関する全国的なアンケート」の結果について報告、説明があった。

理事会終了後、会員同士や関係者の方々との懇親を深めることを目的とした意見交換会を、日本橋三重テラスにて行った。企業会員だけではなく、アカデミア、行政からも参加頂き、活発な意見交換が行われた。

書籍紹介

薬剤師のための英語対応ブック

Ruth Fallon/
長谷川フジ子（共著）

編集・発行　一般財団法人 松本財団

2020 年の東京オリンピック、パラリンピックを控え、海外観光客が増加している。近年、国内の薬局薬剤師が外国人に一般医薬品（OTC 薬）を販売する姿を多く見かけるようになった。この本ではそうした薬局薬剤師のために知っておくと便利な基本フレーズを 30 項目取り上げている。1 日 1 フレーズずつ覚えると 1 ヵ月で対応できるという構成だ。

英会話の例では実際に医薬品を販売するシーンが想定されている。「症状を尋ねる」「既往歴を尋ねる」「薬の相談をする」「使い方を説明する」「金額を伝える」などの場面で、どのように英語で対応するのか具体的に示されている。鼻水、くしゃみ、便秘、頭痛など患者の症状をあらわす英単語も数多く掲載されており、外国人への一般医薬品販売にはたいへん便利なツールと言える。一般産業のビジネス英会話に関する書籍は数多くあるが、医療に関したものはまだ少ない。これからはこうした書籍も作って欲しいと思う。 ※1 冊 300 円（税込み）申し込みは松本財団 HP より

●編集後記

早咲きのオカメ桜が日本橋のオフィス周辺で満開だ。ほどなく淡いピンク色の花を咲かせるソメイヨシノが日本各地で開花することだろう。日本では桜は古くから人々に親しまれており、ただ「花」と言えば、桜を意味するほど、日本人にとって桜は特別な花である。人生で一度は桜の季節の日本に行きたいと思っている外国人も多いのも頷ける。美しい桜の季節を迎える喜びも込めて第３号絆ニュースを発刊する。　（編集子　長谷川フジ子）

一般財団法人 松本財団
MATSUMOTO Global Foundation
〒103-0007 東京都中央区日本橋浜町 2-31-1 浜町センタービル
https://www.matsumotofoundation.com/
編集・制作　株式会社デュナミス

ナースのための英語レッスン

ナースのための英会話「Positive English 4-U」が2018年12月に好評のうちに終了

レッスンの目的

海外からの観光客や医療ツーリズムなどで、外国からの患者が増加している。外国人の患者さん不安な気持ちを少しでも取り除くのはナースのちょっとした一言かもしれない。

英語の苦手意識を取り除き、外国人の患者さんと対話するきっかけをつかむため、ナースのための「speaking」を中心にしたベーシックコースの英会話レッスンを企画した。

レッスンの内容

「Positive English 4-U」の4-Uは、あなたのため(for you)という意味だ。

共催のHAICS(ハイクス)の協力のもと募集をしたところ5名の感染管理認定ナース(ICN)が参加した。講師は、日本語堪能なFallon(ファロン)先生である。Fallon先生は、米国人で1980年来日。慶応義塾大学、学習院大学、杏林大学などの講師を歴任、津田国際研修センター、JICA,川崎国際交流センター及びその他の教育機関で社会人向け英語教育に携わっている。日本人に対する英語教育のベテランの先生である。

レッスンは、10月から12月、月2回　6回コースで金曜日の18時半～19時半の1時間　「オール英語」で進められた。レッスンには、松本財団の日本人スタッフも参加し、Fallon先生の楽しくポイントを押さえた進行で、最初、声が小さかった参加者も回が進むにつれ、笑い声あふれる楽しいレッスンとなった。

内容としては、病院での具体的な6つの場面を想定し、財団オリジナルのテキストを使って、各章でのキーフレーズを中心に繰り返し練習した。

【各レッスンのテーマ】は、以下の通り。

第1章　挨拶をし、手を差し伸べる
第2章　既往例を聞く
第3章　症状を聞く
第4章　診察や検査について説明
第5章　治療方法の説明
第6章　一般的な会話

最終日は、2人の外国人スタッフが、患者役で参加。一連の流れを復習した。全てのレッスンに参加した5人の参加者には、Fallon先生より修了証が手渡しされた。今後も、病院で具体的な場面を想定するなど、バリエーションを持たせて継続実施していく。

Fallon 先生

看護師のための英会話レッスン

2019年春に企画したレッスンは以下の通り。講師は、どちらもFallon先生。

■One day Lesson

土曜日の午後、集中的に看護師のための英会話を学べるクラス。平日なかなか時間が取れない方が効率的に学べるように企画した。テキストで基本を学びながら実際の場面を想定したやり取りで、臨場感たっぷり。

対象者　現場で働く看護師
開催日時　2019年3月16日(土)13:00～16:20
会場　日本橋ライフサイエンスビルディング
　東京都中央区日本橋本町
受講料　3,000円(教材費込み。)
募集人員　20名(先着順)

■2019春シリーズ

2018年秋にスタートしたレギュラークラス。テキストの各章ごとにじっくり学べるように企画。自宅でも予習、復習が可能で、ステップアップのために、おススのコース。

対象者　看護師で、できる限り5回継続して参加できる方
日時　5回コース
2019年4月25日(木)、5月16日(木)、5月30日(木)、6月13日(木)、6月27日(木)、(75分)、毎回18時半～19時45分
会場　サクラグローバルホールディング(株)会議室
　東京都中央区日本橋本町
受講料　10,000円(教材費込み。5回分)
募集人員 6～8名(先着順)
申込方法 氏名、施設名、連絡先メールアドレス、を記入し、下記メールアドレス申込む。
E-Mail　f.hasegawa@matsumotogwi.or.jp
　松本財団「Positive English 4-U」事務局
備考　全5回受講者には、修了証が渡される。
主催　一般財団法人松本財団
共催　NPO法人HAICS研究会

看護師のための海外学会発表助成制度の審査・選考会報告

2019年1月21日、サクラグローバルホールディング株式会社の会議室において、「看護師のための海外学会発表助成制度」の審査・選考会が行われた。

応募者の中より2名が選考され、さらに厳正なる審査をした結果、第1回の採択者として細田清美氏(福井県済生会病院、感染管理認定看護師)が選ばれた。テーマは「医療環境における一価銅化合物による感染対策の検証」。

僅差で次点となった篠原久恵氏(安芸市民病院、感染管理認定看護師)には、今回特別に、奨励賞が贈られた。テーマは「尿道留置カテーテル関連感染の予防のための感染管理認定看護師による院内認定制度の導入」である。

採択者には助成金15万円、奨励賞者には助成金10万円、さらにこの二人には海外学会発表における現地サポートが提供された。

今回、学会発表の場となったのは2019年3月19日から22日までベトナムのダナンで開催されたAPSIC(The Asia Pacific Society of Infection Control)である。発表者二人には後日、松本財団のウェブサイトにおいて学会報告を行っていただく。なお、この助成制度は第2回も実施する予定である。

ベトナムのダナンで開催されたAPSIC2019

速報、米国住宅介護事情

カフマン政子(米国在住医療ジャーナリスト)

トランプ政権による 30 数年ぶりの税制大改革。2018 年度分の税金申告から年収 4,150 ドル以下のお年寄りなどの親族を自宅で世話している場合、税額が一人につき 500 ドル低くなる。米国でも子供が親の面倒を見ているケースが目に見えてきた昨今の傾向を反映しているのだろうか?

米国で80歳の日本人女性と話す

ワシントン大首都圏内に認定慈善団体「日系米人ケアファンド」がある。そのネット通信の相談窓口に「脊髄手術を終えたばかりの母 (80 歳) にどなたか日本語でおしゃべり相手をして頂ける方」を求めていた。「私は77歳の東京生まれです。だんだんと日本語で話す友人が減っていきます。アルツハイマーで日本語だけになってしまったら, 夫や子供や孫は日本語がよくわからないので、どうなるのかと心配です。一週間に一度ぐらいならボランティアとしてお話し相手になれます。同年代なのでお互いに共通点も多いかと思います」と早速返信。

1 月 22 日、バージニア州のダラス空港に近い団地に住む娘さんと白人のお婿さんの手厚いお世話を受けている芳子さんを訪ねた。50 代後半の娘夫婦には子供が無くマルチーズらしき小さな白い毛の犬が忙しげに台所と芳子さんの寝室を行ったり来たり。芳子さんは東京の人、子供は二人。下の娘さんは東京住まい。ご主人は 10 年以上も前に他界し、長女と住むことを選んで2年ぐらい前に米国に移住した。昨年前半に脊髄手術をし、それが不具合で再度 12 月に手術を受け療養中だった。ベッドに横になったままの芳子さんと 1 時間余りペチャクチャ。

言葉の壁?

彼女の世界は娘夫婦とマンション4階の3DK だけだ。何かする気が起きない憂鬱症になってしまったのか、体力的には歩いて食堂に行って食べることもできるそうだが、大抵は一日寝巻のままベッドの上に横たわっている。リハビリにも参加していない。英語が話せないので気が向かないのだろう。東京に居れば、一人で近所の商店街で買い物もできたし、お友達もいただろう。自分の寝室に閉じこもっているだけでは刺激がなさすぎる。手や足の爪には紫のマニキュア、白い髪にも少々紫を入れているようなお洒落なシニア。東京ではさぞ社交的だったのでは…。

次回は「ベッドの中ではなく、ちゃんと服を着て居間で会いましょうね」と励ましてさよならした。「とても優しいお婿さんで」と目を細める芳子さんだが、過保護なのも良くないなあ～。自分のことは自分でしなければならない環境ならば、ちょっと痛くても我慢して起き上がるしかないのだから。

ベトナムチョーライ病院と国際医療福祉大学ドック検診センター開設式典

ベトナム・ホーチミン市にある国立チョーライ病院と日本の国際医療福祉大学は共同で、国立チョーライ病院の隣接地に、ベトナム初の健診専門施設である「ドック健診センター(HECI)」を開設した。2018年10月14日に開設式典があり、松本財団も招待を受け参加した。

式典には、ソン病院長、高木理事長をはじめ、梅田邦夫駐ベトナム特命全権大使、鈴木康裕厚生労働省医務技監ほかホーチミン行政当局者、地元経済界など300名余りが出席した。

ベトナムの獅子舞で幕を開け、冒頭にチョーライ病院のソン病院長が挨拶、疾病の早期発見による病院の負担軽減に期待を滲ませた。続いて、国際医療福祉大学の高木理事長が挨拶に立ち、人間ドックによる早期発見・早期治療が日本を長寿国にした、と述べた。

梅田駐ベトナム特命全権大使は日本を代表して「日越の医療協力は政府間協力のみならず、民間ベースの取り組みも数多く有あるが、今回のドック検診センター設立については国際医療福祉大学の貢献が大きい」と讃辞を送った。

祝賀会では厚生労働省の鈴木医務技監が挨拶の中で、2014年に締結された保健分野における協力覚書のことについてに触れ、早期発見・早期治療の重要性、ドック健診センターの果たす役割の大きさについて述べた。

日越両国は2018年で外交樹立45周年を迎えた。今回のドック検診センターの開設は、そうした記念事業の一環である。2017年11月に行われた日本の安部首相とベトナムのチャン・ダイ・クアン国家主席の日越首脳会談では「投資許可証」が交付され、2018年5月に発表された日越共同声明の中には「健診センター開設を歓迎する」との文言が盛り込まれた。

チョーライ病院は病床数1,800床、1日の入院患者数は2,500人前後の大規模病院である。しかし、病床利用率が140%前後の状況にあり、満足な医療サービスが提供できない状況にある。健診センターによって重篤化する前に疾患を見つけ、早期に治療する意味は大きい。チョーライ病院では2049年までの疾患増加予測を発表しているが、中でも増加率が大きいとされているのは悪性新生物、代謝系疾患、眼科系疾患、循環器系疾患、呼吸器系疾患としている。これらは先進国に見られる疾患であり、チョーライ病院にとっても健診センター開設は急務であったとも言える。

ドック健診センターは完全予約制、6階建で最新鋭の日本製の医療機器検査機器を導入している。医療スタッフは山王病院、国際医療福祉大学三田病院に所属する医師の指導を受けており、日本と変わらない医療サービスを提供する。

CT・MRIなど放射線・画像検査および病理検査の必要が発生した場合は、日本国内にある国際医療福祉大学関連病院との遠隔画像診断支援システムを使ってダブルチェックが行える体制を取っている。

民族色豊かな式典の様子

日本製のMRI